

第十三章 ケンプエルとシーボルト

一 本店と京都支店

明治四十年新年号の「学鑑」の巻頭色紙広告には「進歩的諸君に感謝す」の一文を題し、劈頭まず――

「学術上に商工業上に戦後の日本が非常なる勢を以て勃興し来ると共に、是等に関する知識の需要は著しく激増し来り、したがって丸善の商品も亦一年間に三倍以上となれり。今や丸善の店頭は書籍を以て充積して尺寸の余地だになく、諸君の高覧を煩わすにすこぶる不便となれり」

すなわち昇天の概ある発展ぶりを公言している。そして創業まさに四十年、それが十年前までは教科書と字書のほか、いうに足るほどの書物もあきなっていなかったのに、急速にこの成果をあげたのは、国運隆興の時勢によるのだが、畢竟は顧客の高底の賜物だと感謝しているのは、商家としてあたりまえのこととして、じつは自ら感慨禁じ得ざるものの如くである。それに応ずる拡張が考えられねばならぬ。中村日記をみよ。

「二月十二日 小津清左エ門所有ノ日本橋区通三丁目十一番地々所及建物ヲ三万三千五百円ニテ買収ス」

これは本店をひろげようというのであらう。

「五月十九日 鈴木仁一郎上京セリ。午後盟約者会ヲ開ク出席者小柳津山崎金末竹本川村鈴木金原渡辺及小生

ノ九名ニテ京都支店設置及定款改正ノ為来月十日臨時總會ヲ招集スル事改築家屋ハ店舗間口十五間奥行八間事務室間口六間奥行六間トスル事準則ハ採用規定及進級規定ヲ追加シ余粗原案ノ通決議シ午後九時散會」

すなわち京都支店の開設と、本店の改築と、この二つが議題となっている。そしてこれはこの年から次の年へかけての丸善社史の中樞をなすものである。

このころ東京市も市区改正に着手して、前々から交渉があり、ついにこの年六月、本店の営業場のある通三丁目の二百十二坪は、市に買収されることになって、改築は不可避免となってきたのである。この改築主任は金沢末吉があたり、設計は工学博士・中村達太郎、工学士・佐野利器に依嘱し、工事は清水組が請負うこととなって、実際の着手はこの年十月二十二日からで、翌四十一年十二月三日に上棟式をおこなうこととなる。

仮営業所は、旧店の北の真隣りに建築し、その竣工をまってこの年十一月四日から営業を開始した。これまでは別な建物にはなれていた書店と洋品店とを、一つ屋根の下におさめたのが、顧客から非常に便利がられた。

一方、ブリタニカの月賦販売のため、タイムスから促されて開設した京都出張所が、やっぱり大学所在地のため、相当の成績をあげたため、これを支店に昇格する下相談が始まったのである。

「六月十日 午後一時ヨリ臨時株主總會ヲ開ク出席株主委任状共十八名権利数千九百四ケニテ

原案京都市下京区麩屋町西入ル弁慶石町三十四、三十五番地ニ支店ヲ設置スルコト

定款第三条ヲ左ノ如ク変更スルコト

第三条当会社ハ本店ヲ東京市ニ支店ヲ大阪市及京都市ニ設置ス以上原案ヲ可決ス」



明治40年頃の京都支店

それから見習生を、とりあえず大阪支店へ送ったり、裁判所で登記を受けたり、その他必要な手づきがいろいろ記述されていて、六月号の「学鑑」にいいよ開店の広告が出ている。

丸善京都支店開始

丸善株式会社ハ四十年来外国書籍及新式文房具ノ輸入ニ従事シ、終始一日モ文化ノ開展ニ貢獻スルヲ怠ラズ。日露戦争後国運頓ニ一大急転ヲナシ世界的知識ノ欲求愈々盛ニシテ一刻ノ早キヲ争フ折カラ、御当地学者識者諸君ノ御便宜ヲ計リテ新タニ支店ヲ設ケ七月一日ヲ以テ業務ヲ創メントス。英米独仏及大陸ノ新著新式各種文房具等収メテ肆頭ニ展陳シタレバ願ハクバ貴覧ヲ給ヒテ更ニ幾層ノ御眷顧ヲ仰度奉願上候

京都市下京区三条通麩屋町西へ入ル

明治四十年六月 丸善株式会社 京都支店

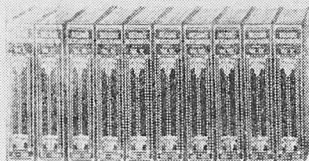
ちなみにこれ以後の支店開設については、大同小異の事情だから記述を省略するであろう。

二一 ネルソン百科全書

ある意味で丸善を飛躍的に発展する基礎をつくったものは、タイムスとの提携による大英百科全書の月賦予約販売にあったといつてよく、そののち、或いはほとんど同時に、矢つぎ早に、センチュリーやドイツのマイエルその他を輸入したところ、その煽り^{あお}は日本出版界にも影響して、出版界に字典時代ともいべき一時期を現出した。この年「学鑑」の雑報が報ずるところによると、まず富山房の「家庭百科事彙」が大成功をおさめた。同文館は「東洋歴史大辞典」、「商業大辞典」を出し、別に「工業大辞典」、「医学大辞典」、「教育大辞典」も企画している。文淵堂は「仏教大辞典」を発表し、弘文館では「歴史大辞典」の完成が近い。富山房は五千頁の「地理辞典」に着手し、金港堂は極秘のうちに「百科全書」をすすめている。三省堂の「大百科全書」は編集費だけでもすでに数万金をこえ、いつ完成するのか見当も立たない。(事実そのためこの発行所は一ど破産したが財界の有力者がその有益な出版であるのをみとめて再建し、おそらく今日までに現れた類書の最善なるもので、後来の辞典はこれに依るところが多い)

そして富山房の「家庭百科事彙」は内容の杜撰の不評にもかかわらず、完成の先頭をきって五、六万部を売りつくし、出版界を驚倒せしめた。当時日本の総人口は五千万と称せられ、一千人に一人の購求者があった割合になる。ブリタニカの丸善におけるこれまでの売行部数はすべてで六千冊で、富山房事彙の十分の一を占める。

THE NELSON'S ENCYCLOPAEDIA.



其内容に於ける材料は、
於て心算に於ける其
實情に於て心算の如きは
直に出産のミレクル也
とは英米諸國の高ロー
動したる定評也

日本及南洋に於ける發
の援は、其方に於て公衆
を驚かしたる實情の害に
半減也下此特異は、
細致にも期日に、
る制限あるを要せられ

全拾八冊裝訂雅緻 總紙數七千七百一十頁 項目七萬餘章 插圖小大一千餘幅 寄稿者約六百餘人 着色版八拾二幅 地圖大一小千餘幅 面而約貳百餘面

ネルソン百科全書豫約申込概要

一 現金一時拂御注文分へ全金額御送金
次第直々へ本書全拾冊發送ノ事
一 月賦御契約分へ申込金額收ノ後當
社豫約掛へ承諾ノ通知ノ同時、第壹
回月賦金額未付ノ右第一回月賦金額
收ノ上本書全拾冊發送ノ事
但し中心要費ノ時、豫約登録名簿ノ順序に従
て、繰上り日付に發送
一 第貳回以後、月賦金へ第壹回月賦金
御支拂ノ同日ヲ以テ其翌月より毎月
御拂込ノ事
一 運賃及保費料へ總テ先拂ニ付該書持
參ノ運賃店へ御支拂ノ事
但し東京大丸洋行、御支拂額ノ事
一 職業欄へ、御職業又ハ御勤務先等參
考ノ事、可キ事項可成詳細御記入被
下度候
一 且御記入ノ事項不備ノ部ハ、海關等可申上候
付其部ハ、御手數同寄附取下至本編輯
一 東京市日本橋區通三丁目
キヤンパル
丸善株式會社
東洋代理店
丸善株式會社支社
大丸市風心街、御支拂額ノ事

Nelson's Encyclopedia の予約募集広告

ブリタニカをそなえる英語読解力をもつ者は、当時
の全日本人の百分の一か、あるいは五百分の一にし
か
当らぬか、まだ極めて少なかったのを思い、更にた
え月賦でも三百円以上で、国民の平均購買力をはる
かに超えるのを思えば、ブリタニカの販売部数は驚異
的
だったといつてよい。

しかし足許から、母国語の百科全書が頻発すること
は、当然のことであり、慶祝すべきことだとしても、
丸善の商売の上からは、大いに「じゃま」にならない
とも限らない。ことにこの年は、ネルソンの百科全書
の売り出しに主力をそそごうとしていた矢先きだけに、
その懸念がつよかったから、その防衛線を張らねばな
らなかつた。幸い、西洋のものをありがたがる氣風が
つよいので、英文を読解するほどの者なら、日英両文
の百科全書をならべられると、英文の方をとるにきま
っている。実際において、当時の日本の編集、印刷の

幼稚未熟の状態では、その遅々たる進行中に、事態はドンドンと急速に変化し、つい最近の事件や学術的発見まで収録する点で、とうてい英文百科全書の足もとにも追いつけない。

丸善はネルソン百科全書売り出しに、この点を強調した。しかもそれは、森羅万象の記述を十冊に縮約し、定価はクロース製が三十五円、背革製が四十五円。ブリタニカの十分の一で、予約金は三元である。その広告文にいたっては、「学鑑」で五十頁をしめ、中に挿入の写真版や、美術品の複写まで入れている。

如何に嶄新の記事に富んでいるかの一例として、おとし終ったばかりの日露戦争の記事に言及している。この世界歴史の大事件も、今までの刊行事典では、チェンバース百科全書に、きわめてわずかの記事を見出すにとどまるが、ネルソン百科全書にいたっては剪截もつとも巧みなる簡潔の文をもって、日露戦争の素因、経過、終結を記述している――

「露国が満洲の撤兵を履行せざりし抑々より説き起して最後にポーツマスに締結したる条約の条件までを摘要し、且つ大山、東郷、乃木、奥、黒木、ステッセルの肖像および三笠、朝日の両戦闘艦、旅順の露艦、露艦ベテロバウロフスク、日本の攻城砲、乃木ステッセル両將軍会合の民家の各図を掲げたり。（この外日露の著名なる各將軍および各戦役等は各々その条下にあり）」

しかもこれでも興味をひくこと薄きをおそれるもののように、文章の一例として、日本が講和条約にまったく賠償金をとらなかったのを“The most unexpected feature of the treaty”と評してゐるのをのせている。

それから「柔術」（まだ柔道という改称は流布していなかった）は、ラフカディオ・ヘルンの文章や、新渡戸稲

造博士の「武士道」のなかの記述から、シオドア・ルーズベルトが私邸に道場をつくって特にこれを習ったという噂などによって、ひろく世界に知られかかっていたにかかわらず、百科全書の上では、ニュー・インタナシヨナルが Wrestling の項にその一様式として不得要領の簡単な説明を加えているにすぎないが、ネルソンは Judo と特立して、十八の型の図を挿入して詳しく説明している。

この他科学者や、機械工学や、各方面の人士に向って、それぞれ興味をひくように、最新発見の実例を歴示し、魯庵一流の「さあさあ、いらっしやい式」の文章で説き立てるのだから、これではどうしても興味をそられぬわけにゆかず、これも又、ブリタニカにつづいての大成功をおさめた。

三 稀観書 双壁

この年丸善はケンプエルの「日本志」の複製版をあつかうのに、ネルソンの百科全書にも劣らぬほど学鑑広告面をさいている。しかもこれはいくら申こみがあっても、二百六十部しか数がないのに、なぜこのような肩の入れようをしたのか。

それはこの本が、稀代の珍籍で、じつは丸善でも内々、この複製本を出そうかという計画をたてていた矢先き、ロンドンで印行せられた。今とちがい明治時代には、印刷製本すべて複製をつくる技術がはるかにヨーロッパに及ばぬから、向うで出来れば、それにこしたことはなかった。

The History of Japan. (Together with a Description of the Kingdom of Siam) Written in High-

Dutch by Engelbertus Kaempfer, M. D., Physician to the Dutch Embassy to the Emperor's Court; and translated from his Original Manuscript, never before printed, by J. G. Scheuchzer, F. R. S. and a Member of the College of Physicians, London, With the Life of the Author, and an Introduction. Illustrated with many Copperplates. London. MDCCXXVII

ケンプエルは元禄年間、日本にきて滞在二年にわたって日本を研究したドイツの医学者また博物学者で、その一代の大著「日本志」はヨーロッパ人のかいて広く刊行せられた最初の日本歴史であり、また最も正確精密な日本風俗および博物志として、日本に関する欧書中、最も貴重なクラシックである。

もうちょっとくわしくケンプエルの経歴をみると一六五一年（日本の慶安四年で由井正雪の乱をおこした年）、ウエストファリアにうまれたドイツ人だが、早くから当時は先進国だったオランダに留学し、語学と共に主として地理歴史学をまなび、音楽の才があつて、器楽にも声楽にも通じていた。

大学はクラカウでおさめ、哲学を専攻して学位をとり、それから *Wanderjahre* に出ること四年、ケーニヒスベルヒでまた大学に入って医学と物産学をおさめた。

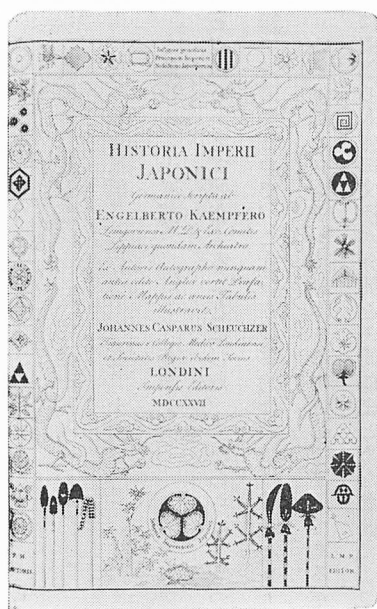
それからスエーデンのカールナ一世に仕えてベルシャ湾におもむき、そこに入ってきたオランダの船隊の医長となって博物調査をすること一年。しだいに日本に興味をもち、おりからオランダ商館で医者が入要だときいたので、よろこんで任についたのが一六九〇年（元禄三年）である。これで分るがゲーテのかいた「ファウスト」のような百科全書的な教養をもった人物が初めて日本にきて、その科学的・哲学的な目で初めて日本を観察したのだ。

元禄四年と翌五年と二度江戸参府をして、大は柳営内部の室の模様から、小は昆虫草花にいたるまで、克明に図録している。

これがこの「日本志」だ。

日本滞在は二か年で郷国にかえって、一七一六年（享保元年）六十六歳で亡くなった。

しかしこの苦心の大著も生前は刊行せられず、その草稿は他の蒐集品や遺品いっさいと共にイギリス人ハンス・スローン卿（のちに大英博物館をつくった人）に買いとられ、彼はドイツ人ショイツェルに英訳させて一七二七年に刊行せられた。ケンプェルの死後十二年目である。この英訳を元にして仏訳（一七二九年ハーグ刊と三二年パリ刊の二種あり）、オランダ訳（一七二九年）が出て、ドイツ原文の出版はもっともおくれ（一七七七―七九年）た。



ケンプェル「日本志」

そこでこの書は、最も古い英訳が最も珍重せられ、全二巻本だが日露戦争後におよんでは、古本値が二百円の高値をよんだ。ブリタニカが三百円、ネルソン百科全書が三十円で買えるのと比較して、いかに高価であったかがわかるう。

そこでロンドンのマックルホース社が、千二百部だけ複製本をつくったので、丸善は切に乞うて、二百六十部の譲与を受けたのだ。

これに丸善はめずらしい頒布方法をもちいた。原本は実価三十七志六片で、日本貨二十二円五十銭である。それを

最初の百五十部 金十五円

次の七十五部 金二十円

最後の二十五部 金三十円

と定価をかえて頒布することにした。すなわちはじめの二回はネット・プライスを割って損をするのを、最後の増額で補償するので、こういう好事的な商法は、時々ヨーロッパでおこなわれるのをまねてみたのである。

いまはこのロンドン複刻本も珍書として高価であるが、めったに世界の古書市場にもあらわれず、後に昭和五年に京都の人吉田文治が分冊を一冊にまとめただけで、他の一七七二年版と装幀、幅員、その他変ることなき複刻版をつくった。これとて稀観書で、容易に手に入るものではない。

このケンプエルにつづいて、日本をヨーロッパに紹介したのはツンベリイ、チチング、フィシエルを経て、シールポルトにいたる。その「日本」は実にケンプエル以後の、全面的に日本を紹介した名著として今日もその歴史的価値はいよいよ高まっている。その原本は一八三二―五二年レイデンで刊行せられて、稀観書だから坊間にあるわけではない。しかしその再版が出て、前々年（明治三十八年）の「学鑑」にその頒布広告がのっている。

Nippon, Archiv zur Beschreibung von Japan und dessen Neben- und Schutzländern: Jesso mit den südlichen Kurilen, Sachalin, Korea und den Liuku-Inseln von Ph. Fr. von Siebold mit Unterstützung des Kaiserl. japan. Hofes, herausgegeben von seinen Söhnen Alexander Fried. von Siebold und

Heinrich Freih von Siebold.

とある。初版はすでに世界的稀覯書だから市販されるわけがなく、これは再版で、その出版のいきさつはこうである。

一八九六年（明治二十九年）がシーボルトの生誕百年にあたり、彼の子のアレキサンダーとハインリッヒの兄弟が、父の遺著があまりに珍籍となりすぎて巷に出でず、たまたま姿を見せても百千金の高価であるのを遺憾とし、流布本にしての再刊を企てたが資に乏しいので、援助を日本にまだ残っている弟子や知人またはその子孫にもとめてきた。するとたちまちに賛成の声がおこり、大木喬任、土方久元、長岡護美、三宮義胤などの諸華族が発起人となって尽瘁したので、有栖川宮家をはじめ、徳川篤敬侯、黒田長成侯、鍋島直大侯、池田輝知伯、伊達宗城伯、松平信正子、津輕承昭伯、大村純雄伯、小笠原忠沈伯の諸華族から資があつまり、宮廷からも内帑金を下された。兄弟は感激してウエルツブルグの書店ウォール（Woert）に托して、刊行をみたのが一八九七年の明治三十年である。元版とは異なった新装二冊本である。原本より図版が減少し、文にもいくらか削除が加えられているが、その代り原版には、第二部が「陸上および海上の旅」と題して、バダヴィヤから日本までの旅行と、長崎から江戸への旅行となっているのに、じつは播州室津までの紀行がのっているだけで、それ以後は尻きれとんぼに終っている。この再版では室津から、大阪・京都をへて江戸まで至り、江戸滞在記、それから江戸をたつて、もと来た道を又かえるまでの七章が補足してある。つまりこの旅行記中の最も興味の多い重要部分にあたる。

これは日本であつめた出版資金にたいする返礼あるいは補償として相当部数が贈られてきたが、それを丸善でも

取りついたのである。只、この再版発行は明治三十年だのに、丸善がこれを販売するのに数年の間隔がある。ドイツの出版元で残品をしばらく倉庫に眠らせて、熱をさまして日本に送りつけてきたのか、その所が今日からでは、明瞭にしようがない。

丸善でのこの販価は十円であった。今ではこの再版本まで貴重本となり、各図書館では特別手づきなしには容易に貸し出すまい。ともあれ、ケンプエルの「日本志」とシーボルトの「日本」は、ともに丸善が取あつかった大稀観書中の双壁である。

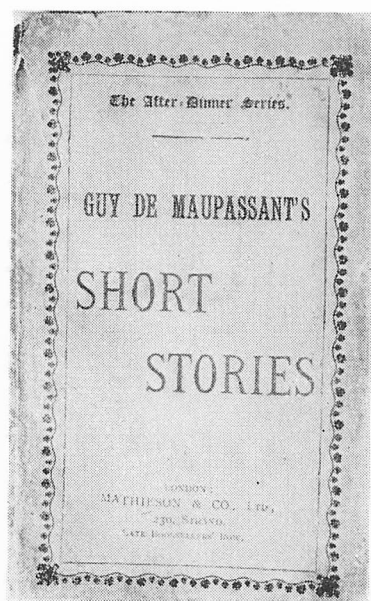
四 モウパッサン

この年の「学鑑」にいくらか注意すべき事として、モウパッサンとマクス・ノルダウの「デゼネレーション」の一頁広告が、しかも見開きになってのせてあることを挙げ得る。一頁広告は別に珍しくない。ただモウパッサンは数年前から、フランス文学の項に他の書籍とならべて、小さな活字で十把ひとからげに紹介されているだけだったのに、この年にいたって急に一頁広告に飛躍拡大されたのは何故か。

前年から勢焰をあげてきた自然主義は、この年にいたって極盛の繁昌をし、小説壇を中心に、全文化界にむかって氾濫した。そしてその自然主義が外国作家に範を求めたのは、モウパッサンが第一である。もともと、わが自然主義運動は田山花袋が震源地と云ってよく、その花袋がモウパッサンへの傾倒もとても深かったのである。彼は After-Dinner Series としう十一巻の短篇集英訳ができたことを、丸善の目録で知ると、矢もたてもたまらず、つ

とめ先きの博文館から著書の稿料の先借りをし、雨をおかして駆けつけて買いつつた感激の思出を語っている。独歩の「糸くづ」は恐らくわが国最初のモウパッサン訳であるし、藤村も「緑葉集」でモウパッサンから換骨脱胎したにちがいない短編をかいており、上田敏は花袋にその英訳書を貸与しているぐらいだから、モウパッサンを知るは花袋をもって最初の人としないが、花袋のあまりに旺盛な随喜渴仰熱にあふられて、又あらたにこれを御興にかついだ傾きがある。

日本の文壇に影響した外国作家は、その深度や範囲ともに、トルストイやゲーテの方が上だろう。しかし小説技術の師として、まねられ、論ぜられたことモウパッサンに如くはなからう。しかもそれは二十年の長きにわたり、余勢は支那事変のころまで曳いた。



The After-Dinner Series

自然主義には反対の立場をとって文壇に現れたと自称する菊池寛が、国際文化協会で外人に現代文学の英語講演をしたとき、「モウパッサンはモウタクサンだ」と駄じやれを云ったことは、当時話柄としてながれたが、そう云われるほど、その影響が大きかったということになる。

SHORT STORIES of Maupassant
After-Dinner Series, 11 vols. Pedlar and

other Stories; A Lady's Man; A Woman's Life; Each.....50 sen

とあるのを見ると、当時文学少年であり、そして今なおアフター・ディナー・シリーズを書架に蔵するこの筆者などには、無限のなつかしさが湧いてくる。

五 周 作 人

摩波商または莫泊三――

中国ではモウパッサンをこう書くのだ。あの国ではモウパッサンが日本のような影響をあたえてはいない。しかしこういう宛て字がしてある位だから、その訳はいくらか出ていて、現にそれを読んだ人に周作人がいる。魯迅の実弟で、白話運動の先頭に立って、中国の近代化には貢献するところの多い人だった。

彼はもと江南の水師学堂（海軍兵学校）にはいった秀才で、はじめに操舵術をならい、後に土木工学にまわされたが、海軍だからもちろん、ならう外国語は英語で、彼は本道をそれてだんだんに文学に心をかたむけ、十八世紀のアディソン、スイフト、それからラム、ステイヴンソン、ミル、リンドなどの味のわかりかたところで、日本へ留学した。そしてこう書いている。

「東京の書店といへば第一に思ひ出すのはどうしても丸善 (Maruzen) である。その本名は丸善株式会社で、翻訳してみると此は丸善有限公司である。我々にとって関係あるのは其の実唯書籍部の部分だけである。最初は個人の開いた店で丸屋善七といったが此の店は私は見た事がない。一九〇六年初めて見たのは日本橋通三丁

目の丸善で、床板は敷いてあったが旧式な建物だった。民国以後火事になって再建して、民国八年（一九一九）東京に往った時行って見たらもう洋館になってゐた。その後大震災で全焼して、一昨年再び行ったら洋館がやはり元の場合に建ってるたが、地名は変わって日本橋通二丁目となった。私が丸善で本を買ふのは前後もう三十年になるから、取引はほんの僅少なのだが老顧客の方といへよう。先々和書と中国の古本を買ひ度いのだが懐がうまくゆかない。けれども此の少しづゝの洋書が却って私には極めて大きな影響があるので、丸善は一法人ではあるが私にはしかし師友の誼ある者と云へるのである。

私が一九〇六年八月に東京に往って丸善で買った最初の本は聖茲伯利 Sainsbury の「英文学小史」A Short History of English Literature 一冊と泰納 Taine の英訳本四冊であった。書架には今でもまだこの両部はあるが、しかしもうその時買った元の本ではなくなっている。」（周作人「東京の思い出」学鐙昭和十二年四月号）

じつは日露戦争をさしはさんで前後の勃興時代の丸善。ブリタニカで辞書旋風をおこし、自然主義の疾風怒濤に乗り合せた頃の丸善。その店の様子まで書きとめている顧客はほとんどない。銀座日本橋の目ぬきの通りにあるものとしては、もう見すばらしくなって、多少は丸善自身でも気がひけていたのであったらうと思う。

「丸善が三十年来の旧陋屋に安んじて何等の浮華なる設備をもなさず、最も保守的な営業をなすは、一切の店費を最小限度に省略して、以て非常なるリスクの伴える書籍を最低廉に供せんとする為めにして、丸善はこの目的を達するがために十年一日の如く奮闘し、同情ある顧客の庇護を幸いして、以て今日に到るを得たり」

戦勝の機運に乗った明治三十九年の新年号の巻頭宣言に、こんな言葉をもらしているのである。その丸善の期待する「同情ある顧客」は中国からの留学生のひとりの中に見出されて、周作人は、その旧屋の印象と、そのころの店員の客のあつかいぶりを、こう書いているのである。

「人は恋愛の経験に於て、特に初恋は忘れ難い気持があるが、他の事柄でも亦恐らく此の通りであらう。最初の印象は非常に重要なものである。丸善の店の様子も数度の改変を経たが、私の覚えてゐるのはやはりあの最初の古い建物である。二階は決して大して広い方でなく、四壁書架で中間の沢山の長い卓子の上には新着の本を並べてあって、客が自由に繙いて見るに任せてある。時に角にあるのが書架の後に落ちる様な事があると、半日探しても本が見つかからない事がある。一、二冊の本を選んで勘定して貰はうとしても一寸人が見つかからないので、どうしても大声で店員を呼ばねばならない。もし誰かゝるても仲々埒が明かないと下田君が自らやって来て応待してくれた。こんな大して客を監視しない態度は一種愉快な事だ。後に改築してからもやはり同様であつたが、私の思ひ出すのはどうしても元の店の様子である。或る新聞記者が、かうやって書籍がなくなる事がありはしないかと問うたところが、たとへなくなつても皆大抵小冊に過ぎず、総計やつと四百そこそこで、沢山人を備つて監視すると却つて不経済だと答へたといふ事を覚えてゐる。」(同上)

こうして丸善に親しんだ周作人は、たびたび祖国と日本との間を往来し、帰国している時でも、ほしい洋書は丸善に注文した。彼の好みは当時の中国のおかれた立場から、被圧迫の弱小民族の上にあり、その文学を好んで、ブルガリヤ、ボスニヤ、フィンランド、ハンガリヤ、新ギリシヤなどのものをあさつたが、数は少なかったとしても

みな「丸善から送ってもらえた」といっている。とくに彼の好みはハンガリヤの育珂摩耳（マウルス・ヨークアイ Jókai Mór or Maurus）で、ハンガリヤのウォルター・スコットの称があるが、保守家でなく革命家であるのが気に入って、その書冊は今でも「私の蔵書の佳品といえよう」とも云っている。ヨークアイを愛読書とするこの筆者は、これで周作人にとくに親近感をもたざるを得ない。

大道ことごとくローマに通ず。ラフカディオ・ヘルンは東京大学に講師をしている時、学生にしばしば懸賞文をつくらせ、優秀なるものに、テニソンやウァーズワースの詩集を、丸善から購求してきて与えた。いま又周作人を顧客のひとりとして見出す。しかしその背後に世に知られずに終ったヘルンの如き、周作人の如き読者は、幾人ともなく、あるいは幾十人ともなくあったに違いない。果然、丸善の窓は世界に向かって開かれていたのだ。